# 学習課題を自分事としてとらえ、新聞を使って課題を解決する子ども
## ～ ２年次 ～

見附市立葛巻小学校

### １　ＮＩＥ実践のねらい

新聞に触れた経験のある児童が少なく、昨年４月に取ったアンケートでは、「新聞を読む」と回答した児童は２割程度であった。そこで昨年度は、新聞の存在を知る、新聞に目を通してみるといった、まずは新聞に親しみ、興味・関心を深めていくことを目指した。学年の実態に応じて取り組んでいくことで、新聞から興味がある分野の情報を得ようとしたり、新聞を手に取ったらすぐにめくってみたりする姿が見られるようになった。また、新聞を用いてカタカナや漢字、アルファベット探しなどを行うことで、自分たちが学習したことが実生活でどのように使われているのかを学ぶことができた。気になった記事を紹介する、一つの記事について話し合うなどの活動では、社会情勢に目を向ける、新しい知識を得るといった、それまで知らなかった世界に触れるよい機会となった。

今年度は、ＮＩＥの指定を受けて２年次の研究・実践である。昨年度の実践の成果と課題を職員で共有し、「新聞に親しむ」から「新聞で学ぶ」「新聞を作り発信する」を授業に取り入れていく。

### ２　本年度実践の概要

#### （１）職員研修の充実

①６月 16 日（月）ＮＩＥ研修会　講師：木村　隆　様（新潟日報社）

新聞がどのように構成されているか、記者はどの視点で記事を書いているかなど、新聞の作り方について教えていただいた。授業の中で新聞を作成する際のポイントとして、記事と作文の違いを学ぶことができた。

②６月 30 日（月）ＮＩＥ校内授業研修会　講師：山之内　朋子　様
（ＮＩＥアドバイザー　柏崎市立比角小学校教頭）

公開授業を参観していただき、その後の協議会では、公開授業の中の具体的な場面を取り上げながら、授業づくりについてご指導いただいた。またＮＩＥの指定を受けて２年次では、どのように研究を進めていけばよいか助言をいただいた。新聞を活用することでどのような力を付けたいのか、ねらいを具現化するためにはどうしたらよいのか、授業をつくる際の土台を学ぶことができた。

## （２）新聞に親しむ環境づくり

①「ＮＩＥタイム」の設定

毎週水曜日の朝学習の時間を「ＮＩＥタイム」として、各学級で新聞に親しむ活動を行った。発達段階や学年・学級の実態に応じて、新聞紙を使った工作や新聞パズルなど新聞に親しむ活動や、気になった記事を紹介し合う、記事について話し合うなどの活動を行った。

＜活動例＞

| 低学年 | 中学年 | 高学年 |
|---|---|---|
| ・カタカナ言葉探し<br>・習った漢字探し<br>・気に入った写真を紹介し合う<br>・新聞ビンゴ | ・気に入った記事を紹介し合う<br>・子ども向けのクロスワードに取り組む | ・記事の視写<br>・一つの記事について感想を交換し合う<br>・記事の見出しづくり |

②ＮＩＥコーナーの設置

ア：新聞コーナーの設置

児童玄関ホールに、新聞を自由に閲覧できる新聞コーナーを設置した。通りかかったときに興味のある記事を読んだり、ニュース紹介のための記事を探したりする児童の姿が見られた。

イ：委員会の注目記事コーナーの設置

児童玄関ホール掲示板に、それぞれの委員会が決めたテーマの記事を選び、感想を加えて掲示した。各委員会の児童が、自分たちが活動していることと新聞に載っている社会的な出来事を関連付けて考えることができた。

ウ：先生たちの注目記事コーナーの設置

委員会の注目記事コーナーと同じ掲示板と、階段踊り場の掲示板に、職員が注目した新聞記事を掲示した。職員は輪番で担当し、感想を加えて１，２週間をめどに新たな記事を掲示した。どの先生が何について書いたのか、よく覚えている児童もいた。

エ：学年掲示板でのＮＩＥの取組の紹介

各階段の踊り場にある学年掲示板に、学年全体の活動写真を掲示するとともに、ＮＩＥの取組も掲示した。児童も職員も、各学年のＮＩＥの取組を知ることができ、他の学年の活動に興味・関心をもつことにつながった。

### （３）授業の中での新聞活用

今年度は、ＮＩＥの指定を受けて２年次の研究・実践であり、様々な授業実践を行うことを年度当初に確認した。よって、学年で同じ単元でも違う内容の授業公開や、全く違う教科・単元での授業公開を行った。

| 学年 | 教科等 | 単元名等 | 新聞活用場面 |
|---|---|---|---|
| １年 | 学級活動 | しんぶんをつかって、お気に入りのがぞうをつたえあおう | 長岡工業高等専門学校が作成したアプリを用いて、気に入った新聞の画像を伝え合った。 |
| ２年 | 国語 | ものの名前をあらわすことば | 新聞記事の中からものの名前をあらわす言葉を見付け、上位語・下位語に仲間分けした。 |
| ３年 | 国語<br><br>外国語 | 書き手のくふうを考えよう<br><br>Unit 6 ALPHABET | 役に立つ情報を新聞記事から見付け、友達と伝え合った。<br>新聞記事から、自分の名前のアルファベットを探す活動を行った。 |
| ４年 | 総合的な学習の時間 | ひなん所の工夫を考えよう　～防災スクールに向けて～ | 災害や避難所のことが書かれている新聞記事を読んで、多面的・多角的に避難所について考えた。 |
| ５年 | 総合的な学習の時間 | もっと知りたい『食と命』 | 長岡工業高等専門学校が作成したアプリを用いて、「食」をテーマにして新聞を作った。 |
| ６年 | 国語 | プラスチックごみの問題について考えよう | これまで学んできた内容と違う視点の新聞記事を読み、自分の立場を明確にして意見を書いた。 |
| 特別支援 | 生活単元学習 | 学習室フェスティバル | 各学級で新聞を活用したフェスティバルの出店を考え、出店した。 |

## ３　実践例

### （１）４年　総合的な学習の時間

### 「ひなん所の工夫を考えよう　～防災スクールに向けて～」

授業者：教諭　中澤　文

① ねらい

様々な立場の被災者の思いに触れたり、避難所の割り付けをグループで作ったりする活動を通して、被災者に寄り添った避難所の在り方を考えることができる。

② 使用した記事

「自分たちも力に」　信濃毎日新聞　2019 年 10 月 18 日
「被災地無情の雪」　河北新報　2011 年 3 月 17 日
「みんなで生きる」　讀賣新聞　2011 年 3 月 20 日
「避難所が臨時『特養』化」　夕刊讀賣新聞　2011 年 3 月 26 日

③ 主な手立て

ア：主体的に課題を解決させるための課題設定

本時は、災害時における避難所の在り方をグループで話し合い、自分たちで体育館の避難所の割り付けを作る。翌々週にある防災スクールで、実際に自分たちでよりよい避難所を作るという目標を示し、意欲を高めていく。また、将来災害にあった時に、「自分も避難所で過ごすことがあるかもしれない」ということを想定させ、自分事として主体的に活動に取り組む姿を期待する。

イ：本時のねらいを達成するための新聞の活用方法

当時の状況や避難生活への思いを理解するために、新聞記事を読んでいく。災害についての新聞記事を集めるとともに、避難所のことが書かれている記事に焦点を当てて、被災者の困り感や避難所で助かったところなどの記事を探す。本時では、教師側から提示された、様々な立場の被災者がいることに気付ける記事を基に、多面的・多角的に避難所について考え、被災者に寄り添った避難所の在り方を自分たちで考える上での拠りどころとする。

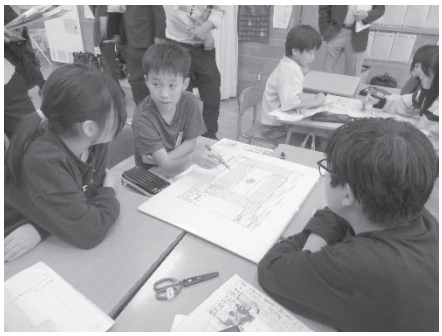
④ 授業の実際

児童は、総合的な学習の時間や社会科の学習で、防災・災害の視点で川を見つめてきたり、地震や水害による歴史について学んだりしてきた。その際、過去の複数の新聞記事を取り上げ、掲示することで、当時の状況や避難生活への思いを理解につなげるようにしてきた。

本時では、避難所のことが書かれている記事に焦点を当て、高齢者や幼児がいる家族、寝たきりの人や車椅子に乗っている人、ボランティアとして活動している人等、様々な立場の被災者がいることに気付ける記事を活用した。導入部分で、そうした人たちが何に困っているのかを全体で共有した後、グループで避難所の割り付けを考える活動につなげ

た。

避難所の割り付けを考える際には、ホワイトボードを活用した。居住スペースや物資を置く場所等をホワイトボードに記入し、どうしてその割り付けにしたのか理由も記入した。「高齢者はトイレが近い方がよいのではないか」「みんなが物資を取りに行きやすいように、物資はここに置くとよいのではないか」等、児童はそれぞれの立場に立って考えることができた。新聞記事を活用しながら、「今後、自分も避難所で過ごすことがあるかもしれない」と自分事として多面的・多角的に考える姿が見られた。



**（２）６年　総合的な学習の時間**

**「プラスチックごみの問題について考えよう」**

**授業者：教諭　土田　悠理**

① ねらい

使い捨てストローについての記事を読み、紙とプラスチックのどちらがよいかについて立場を明確にして話し合う活動を通して、自分事としてプラスチックごみの問題について考えることができる。

② 使用した記事

「どっちがエコ？」　読売 KODOMO 新聞　2025 年 6 月 12 日

③ 主な手立て

ア：主体的に課題を解決させるための課題設定

本時では、使い捨てストローについての記事を取り上げ、その記事を読んでどう考えたか全体で議論する。使い捨てストローという身近な題材を取り上げることで自分なりの考えをもつことができると考える。そして、紙とプラスチックのどちらがよいか揺さぶりをかける記事を読むことで、プラスチックと紙のそれぞれのよさを再認識することができる。それを踏まえて、立場を明確にして話し合う活動を通して、自分事として課題に取り組む姿を期待する。

イ：本時のねらいを達成するための新聞の活用方法

本時では、これまで学んできた内容とは違う視点からの記事を読むことで、プラスチックごみの問題について様々な考え方があることに気付かせたい。また、前時までに読んだ様々な新聞記事の情報と関連させて考えるこ

とで、その考えに至る根拠をもって自分の意見を書く姿を期待する。

④ 授業の実際

授業やＮＩＥタイムを通して、様々な新聞記事を読んできた児童たちである。始めは、子ども新聞を中心に読んでいたが、回数を重ねるうちに子ども向けのものではない新聞も読めるようになった。また、「この内容はこの記事に書いてあった」等、根拠となる記事をアドバイスし合う姿も見られるようになり、記事の内容をよく読み込んでいる様子が見られた。

本時では、普段使用し身近であるストローに着目し、「プラスチックストローと紙ストローのどちらがよいか」という問いに対して、「紙」「プラスチック」「どちらともいえない」の三択で自分の立場を考えた。その際、根拠となる記事や資料を基にして、なぜそれを選んだのか理由をまとめ、グループで交流した後、全体で共有した。「紙だと環境に優しいイメージがあったけれど、プラスチックより生産過程で出る二酸化炭素の量が多い」「プラスチックも紙もどちらも環境に優しいとは言えない」等、記事を根拠に考えることができた。

振り返りでは、「紙とプラスチックのどちらにも良いところと悪いところがある」「どちらかを選ぶのは難しい」等、自然循環の観点や二酸化炭素排出の観点から、自分事として考える姿が見られた。

## ４　成果

継続的に新聞を活用した活動を取り入れ、新聞に親しむ環境を作ったことで、より新聞が身近なものになった。新聞記事から新しい知識を得たり、自分の考えを明確にするための根拠を探したり、新聞を作る際の本文や見出しの書き方を学んだり、「新聞で学ぶ」力が育ってきた。また、様々な学習活動の中に、「新聞を作り発信する」活動を取り入れてきたことで、子どもたちも慣れ、意欲的に新聞作りに取り組むようになった。その際、相手に伝わるようにするにはどのように書いたらよいか、書き手はどんな思いで書いたのか等、発信する側、受ける側両方の立場を経験することを通して、表現力や読む力を伸ばすことにつながった。ＮＩＥ実践で学んだ「新聞を活用することのよさ」を取り入れながら、今後の授業実践に活かしていきたい。

（石沢　恵美子）

# 担当NIEアドバイザー及び担当新聞通信社からの一言

## １　担当NIEアドバイザー　　柏崎市立比角小学校　教頭　山之内　朋子

NIEアドバイザーとして２年間、葛巻小学校における実践に関わらせていただきました。その中で最も印象に残った成果は、職員のチーム力が大きく向上したことです。教科や立場を越え、新聞を教材としてどう生かすかを話し合い、実践と振り返りを重ねる姿が学校全体に広がりました。

また葛巻小での実践では、課題を自分事としてとらえる子どもの育成を軸に、新聞を活用して主体的に解決策を考える学びが大切にされていました。どの実践においても、新聞を活用し学びを深める子どもたちの目の輝きが印象的でした。こうした取組は大きな手応えを生みましたが、これは通過点に過ぎません。本当の成果は、きっとこれから見えてきます。今後、子どもたちや職員がNIE実践を継続し、学びをさらに深めていく中で現れてくるものだと思います。２年間、共に学ばせていただいたことに心から感謝申し上げますとともに、日々熱心に実践を積み重ねてこられた職員の皆様のご尽力に、心から敬意と労いを表します。

## ２　担当新聞・通信社　　読売新聞新潟支局長　浜田　泰宏

見附市立葛巻小での研究発表会（10月17日）を担当しました。中澤文先生の４年生のクラスでは「ひなん所の工夫を考えよう」をテーマに、児童が新聞の情報をもとにして避難所のレイアウトを考えました。さまざまな立場の人が集まることを念頭にトイレや授乳スペースなどの配置に知恵を絞り、女子児童の１人は「すぐに使えるように、高齢者が過ごす場所をトイレの近くにした」と話していました。優しい気持ちがとてもよく伝わってきました。土田悠理先生の６年生のクラスは「プラスチックごみの問題について考えよう」のテーマで、プラスチックと紙のどちらが「エコ」なのかを考察しました。どちらとも言えない問題について、一人一人が自分の考えをしっかりと述べる様子が頼もしく思えました。

ＮＩＥアドバイザーとして指導された山之内朋子教頭に感謝申し上げます。

授業を拝見し、ＳＮＳが当たり前の時代に生きる子供たちにとって、正しい情報を入手するための手段として、新聞の存在をますますアピールしていかなければならないことを実感しました。学校現場で日々奮闘されている先生方にも、変化が著しいネット社会を注視し、正しい情報源をどうやったら獲得できるかを教育の場で伝えていただけたらという思いです。